

Title	遠峰先生と私
Sub Title	
Author	富田, 広士(Tomita, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2007
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.80, No.1 (2007. 1) ,p.125- 126
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	遠峰四郎先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20070128-0125">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20070128-0125</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 遠峰先生と私

遠峰先生は二〇〇六年一月二九日、ご逝去になられた。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。先生には、一九七六年四月「現代中東論」（現在は「現代中東論」と呼ばれている）担当の法学部助手になって以来、足掛け三〇年にわたり、公私を問わず様々な面でご教授いただいた。

助手になった当初、それまで石川忠雄先生のところでは中国政治をやっていた私は、イスラームに関する基礎知識、アラブの歴史、ユダヤ人の歴史などの代表的な文献を指示していただき、しばらくして研究室棟七階の先生の研究室を訪ねては、先生に時には的外れな質問もぶつけていた。そんな時、先生は「そうねえ」といつも丁寧に切り返されて、中東地域を政治学から研究する際にイスラーム理解を忘れてはいけないと再三再四いわれた。しばらくして、私は一九七九年から八一年にかけ、カイロで二年間生活しながら、カイロ・アメリカン大学で

アラビア語を勉強した。私はその時まで強い親西欧主義者であったので、自然関心はエジプトの貧困、近代化の阻害要因に向けられ、気がついてみると開発 (development) という視点からエジプトの開発をめぐる政治史をやるようになっていた。先生は「このテーマは重要だからやるように」といわれ、それでもイスラーム理解の大切さは折に触れ繰り返された。

その後も私は「開発」への関心を持ち続け、一九九〇年代には John Waterbury などの研究に基づき、アラブ諸国を越えて、トルコ、イランまでカバールして、開発戦略の諸相を「現代中東論II」で講義し、今に至っている。この間先生とのレッスンは先生のお宅に場所を移して続いた。年一回お正月であったり、二、三年、間が空いてしまうこともあった。自分がその時にやっていたことと、中東情勢、日本の中東理解など、話題は尽きなかった。私の現地経験の方も一九八七年から八八年にかけてのヨルダン、一、二年に一度のエジプト出張など、横上げを続けていた。

先生とのお付き合いのせいなのか、現地体験の積上げのせいなのか、二〇〇〇年前後から自分を越えた力が少しずつではあるが、私の中の硬い親西欧主義を溶かしは

じめた。三大宗教間の協調・対立、中東の文明と西欧文明の関係、地中海文化圏の中の相互影響、アラビア語の繊細さ・原理性、アイデンティティの複合性など、現在のアメリカに見る物質・技術の先端性とは別の中東文明が持つ凄さに気がつきはじめた。インターネットと金融資本主義によって覆いつくされた観があるグローバル化世界において、人間信賴がここまで傷ついた現在、次の時代をどう切り開いたらよいか。次の時代の人間の生き方、人と人との繋がり方の手本は、ひょっとしたら

中東の人たちの日常的な生活、思索を子細に検討することによって得られるのではないのかという思いが湧いてくる。もちろんアイデンティティ複合にあやかかって、私はまだ中程度の親西欧主義者にもとどまっているのだが。残念なことに、日本を含む先進工業諸国の中東・イスラーム理解は、遠峰先生が注意を喚起されたような平和的な形ではあまり進んでいない。ムスリム労働者の国際移動、二〇〇〇年以降のアル・アクサー・インティファード、9・11、イラク戦争など、過酷な現実政治を目前に突きつけられることによって、否応なく見方の変更を迫られている感が強い。

先生、有難うございました。浅才な人間ですが、これ

から研究者の端くれとして、何とか自分の研究をまとめます。いつもの「そうねえ……」で結構ですので、見守っていただけたら嬉しいです。

富田 広 士